

# スーパーバイザー視点による個人スーパービジョンの展開と質の評価に関する一考察 — スーパービジョンにおけるダイナミズムを俯瞰し、振り返る手法について —

○鈴木 智之（イーハトーブ地域包括支援センター）（12210）

## I. 研究目的

スーパーバイザー（以下、「バイザー」とする）とスーパーバイジー（以下、「バイジー」とする）による個人スーパービジョンの実践後、バイザーとして逐語録をプロセスレコードにまとめていたが、偏った傾向の振り返りとなっていたことに気づいた。そのため、バイザーとしての主観的な枠組みを出ないにしても、できる限り客観的に個人スーパービジョン実践を振り返り、何がどのように展開され、うごめいているかを明らかにすることで、個人スーパービジョンの展開と質の評価ができるのではないかと考え、研究に取り組んだ。

## II. 研究方法

バイジー（相談援助経験約 10 年、介護支援専門員、社会福祉士）とバイザー（相談援助経験約 20 年、主任介護支援専門員、社会福祉士）との個人スーパービジョンを IC レコーダーで録音し、逐語録にまとめ、SCAT（Step for Cording and Theorization）を用いて分析を行った。

## III. 倫理的配慮

一般社団法人日本ケアマネジメント学会研究ガイドラインに基づき研究を進めた。バイジーに対し、研究の目的・趣旨、個人や機関の匿名性は保持されることを口頭と文書で説明し、同意を得た。

## IV. 結果

分析により明らかになったストーリーラインを以下に要約する（構成概念は【 】部分）。

バイジーは、相談援助専門職に【クライアントの信頼に応える責務】があると意識している。実践において【固定化した盲目的支援】や【意図なき実践】など【専門職としての力量不足】により、【支援者としての責務が果たせない不全感】を抱き、【クライアントの不利益】に結びつくことへの不安がある。また、【ネガティブ思考のリフレクションなど実践における自分自身の思考や行動の傾向】があり、【言語化への苦手意識】や【予見できない出来事への戸惑い】など自身の短所についての発言があった。しかし、この【ウィークネス覚知】が【よりよい専門職への志向性】を目指す【成長の原動力】になっていた。

【対話の中で整理】し、【一歩引き距離を保つバランス感覚】を養い、【「待つ」ことによる主体性尊重】や【「聴く」ことが支援の基盤】というバイジーの強みは、【ウィークネス覚知】が出発点となってバイジーの【ポジティブとネガティブの両価的自己肯定】へとつながっていた。

バイジーは、【個別性と全体性の相互作用を踏まえた偏りのない対象理解】のための【認知と行動の結びつき】を意識し実践に臨むため、【オープンクエスチョンによる積極的な「問い」】を立てていくことを当面の目標とした。

以上のストーリーラインから、理論記述を行ったところ、個人スーパービジョンにおいて、バイジールが感じたことを振り返り、考え、言語化するプロセスを経て、バイジール自身の過去の体験の意味づけや現状理解の変化、そして未来への展望と行動への語りがなされたことが明らかになった。

表 1 SCAT を用いた分析過程（一部）

| 番号  | 発話者  | テキスト                                                                    | ＜1＞テキスト中の注目すべき語句                      | ＜2＞テキスト中の語句の言い換え                 | ＜3＞左を説明するようなテキスト外の概念                                      | ＜4＞テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）                                    | ＜5＞疑問・課題                                  |
|-----|------|-------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| 88  | Svee | こちらのかかり方で、利用者の方の暮らしや人生まで変わるというのは、すごく責任のあることだと思うので、それを本人なしで考えるのは違うと思うので。 | かかり方/暮らしや人生まで変わる/責任のあること/本人なしで考えるのは違う | 接し方/転換点/分岐点/大事/重要/利用者本位/自己決定     | 支援者のかかり方/暮らしへの質を左右/暮らしの転換点・分岐点/クライアント中心/意思決定支援            | クライアントの生活の質の良し悪しに大きな影響を及ぼす分岐点/クライアントのいるところからはじまる              |                                           |
| 240 | Svee | そうですね。たぶん利用者本位からずれたんですよ。だからそこを軸にするとたぶんできるかなと思います。そこを考えれば。               | 利用者本位からずれた/そこを軸にする/たぶんできる/そこを考えれば     | クライアント中心から外れる/基点/原則/おそらく可能/思考/洞察 | クライアント中心からの逸脱/専門職としての盲目的支援への危惧/クライアントの不利益/基本的価値を守るための対処行動 | クライアントへの不利益/支援者としての責務が果たせない不全感/望ましい支援からの逸脱/クライアントのいるところからはじまる | ・クライアントのいるところからはじまらない状況へのアプローチをどのようにすべきか？ |

## V. 考察

スーパービジョンの質を評価するために SCAT を用いて分析した結果、以下のような特徴があると考えられる。

- ・ バイジール自身と周囲の環境面のストレングスやセッション内におけるバイジールの変化の軌跡を明らかにする
- ・ スーパービジョンを見える化し多角的かつ多面的に捉えるきっかけとなる
- ・ 分析のプロセスそれ自体がバイザーのリフレクションを促す
- ・ スーパービジョンにかかわる実践者が比較的身近に行える手法である

一方で、あくまでバイジールの語りの文脈を中心としたバイザーの視点による分析であり、スーパービジョンのすべてを物語るものではない、バイザーの働きかけが見えにくい、バイジールが分析をするとまた違った視点での結果が生じるであろうといった限界もある。また、分析の過程で抽象化、一般化をしすぎた場合、スーパービジョンの個別具体的な側面を見落とし、削り落としてしまうリスクもある。

## VI. 結論

スーパービジョンを文化として実践に浸透させるためには、その理念や方法を伝えるだけでなく、実践の場で実施可能な評価のあり方についても考えていく必要がある。

そのような意味では、SCAT を用いた分析はバイジールの強みの再発見、バイザー自身のリフレクションや自己覚知を促す、スーパービジョンのダイナミズムを俯瞰し、実践の中で評価する手法となり得ると考えられる。

## 付記

本研究は、日本ケアマネジメント学会第 21 回研究大会で発表した内容に、加筆・修正をしたものである。

## 参考文献：

大谷尚（2019）「質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで」名古屋大学出版会